ニヒリズムは超克できるのか

――西谷啓治のニーチェ理解――

国際日本学研究科
国際日本学専攻　文化・思想領域
4911166001
酒井　梨帆

【要旨】

西谷啓治（1900-90）は、自分にとっての根本的課題は「ニヒリズムを通してのニヒリズムの超克」だったと言っている。ニヒリズムは、虚無主義と訳されることもあるが、ここで西谷が言っているのは「ただの虚無的な気分」ではない。例えば、虚無感は、器の中の水が無くなった時に感じるようなものである。また器の中に水が戻れば、その虚しさは解消されるだろう。一方、ここで問題にされているニヒリズムは、ざるにひたすら水を入れ続けるようなものである。どれだけ努力しても、それは徒労に終わる。しかも、ざるに水が溜まらないことを理解しているにも関わらず、そこに水が無いことに耐えられないのである。簡単に言えば、ニヒリズムにおいて一切が無意味、無価値に感じられるのは、われわれがそれらに対して「なぜ？」と問い続けた末、答えが無いことを見いだすからである。その問いは、倫理的、宗教的なものをも含んだすべてのものに向けられ、終には、そのように問う自分自身にも向けられる。そして、問われている自分自身も問いに答えることができず、これまで自分が無意味だと思ってきたものと同様、自分も無意味であることに気づくと同時に、自分がその事実に耐えられないことにも気づくのである。このような状況は、人間にとって「絶望」と言えるものだろう。西谷にとってのニヒリズムも、そこに「留まり得ない」絶望のようなものだったと思われる。つまり、西谷はニヒリズムを絶望と同じ深さで捉えていたのである。ニヒリズムは、そこに留まり得ないものであるため、ニヒリズムに陥った者はその超克を求めると考えられる。しかし、そもそもニヒリズムは超克できるのか。「絶望」は、一切の望みが絶たれている故に「絶望」なのであって、超克できるのであればそれは「絶望」ではない。ニヒリズムも同様である。先に述べた通り、西谷は、自分にとっての課題は「ニヒリズムの超克」だったと言っている。では、それはどのような事態なのだろうか。それを明らかにするには、まずニーチェ（1844-1900）にまで立ち戻る必要がある。

西谷がニヒリズムについて論じる際、最も大きな役割を果たしているのはニーチェである。つまり、西谷は、ニーチェのニヒリズムを念頭に置きながらニヒリズムと対決したと言える。しかし、ニーチェ自身はニヒリズムを超克する（überwinden）べきだとは言っていない。ニーチェにとって、ニヒリズムは人間の行き詰まりであり、超克できるようなものではなかったのだと思われる。それは、先に説明した絶望に近いものと言うこともできるだろう。実際、ニーチェが超克するべきだと考えていたのは、「人間（Mensch）」そのものである。「人間」を超克した「超人（Übermensch）」について、ニーチェは多くの箇所で語っている。ただ、ニーチェは、「人間」がどのように超克されるのかという点を必ずしも明らかにしていない。一方、西谷は、ニーチェの言葉である「権力への意志（Wille zur Macht）」や「運命愛（amor fati）」、「永遠回帰（ewige Wiederkunft）」などを用いながら、ニヒリズムの超克がどのような事態なのかを説明している。西谷は、ニーチェの言葉を使いながら、ニーチェの課題であった「人間」の超克を自らの課題であった「ニヒリズム」の超克として捉えなおしたのだと考えられる。本論では、それがどのように行なわれたのかを明らかにする。それによって、ニヒリズムは超克できるのか、できるとしたら、それはどのような事態なのかということが分かるだろう。

【要旨】

まず、第一章ではニーチェにまで立ち戻り、ニーチェがニヒリズムをどのように捉えていたのかを確認する。それによって、ニーチェにおいてニヒリズムの超克が中心的な問題にされていない理由が示される。第二章では、ニーチェの課題であったと思われる「人間」の超克とは何かを明らかにするため、人間の行き詰まりを問題にしたい。その際、人間の「意志」のあり方に注目して考察を進める。続く第三章では、人間の行き詰まりの原因である「真理への意志（Wille zur Wahrheit）」に対立する形でニーチェによって語られている権力への意志が、「人間」の超克にどのように関わっているのかを確認する。その中で、ニーチェはその二つが具体的にどのように結び付くのかを明らかには述べていないことを示す。

それに基づいて、第四章では、西谷がその二つを「自己」の「没落（zugrunde gehen）」の体験によって結びつけ、ニーチェの課題であった「人間」の超克を、西谷にとっての課題である「ニヒリズム」の超克として捉えなおして考察していることを確認する。そして、西谷が展開したニヒリズムの超克が、ニーチェの言うニヒリズム、超人、権力への意志、運命愛、永遠回帰等とどのような関係にあるのかを明らかにし、ニヒリズムの超克とはどのような事態なのかを考察する。

西谷は、単に「権力への意志」と言うのではなく、権力への意志の「立場」と言う。なぜなら、西谷は「権力への意志」が人間を「超人」にすることでニヒリズムが超克されるのではなく、権力への意志の「立場」に「自己」が立つことによってニヒリズムが超克されると考えたからである。権力への意志の「立場」に立つ「自己」とは、絶対的に固定された視点を認めず、あらゆるものを権力への意志の現れだと考えることができる「自己」である。この世の背後にあの世を想定することは、徹底的なニヒリズムにおいて不可能である。そうすると、生成の世界であるこの世だけが、唯一の世界として「自己」の前に現れる。一方、権力への意志は虚構と破壊、創造を繰り返すため、無限に別であり得る。権力への意志の「立場」は、絶対的な視点をもたないニヒリズムであると共に、創造的な立場なのである。

そのような立場に立つ「自己」の具体的体験の一つとして、西谷は運命愛を挙げている。運命愛とは、必然性が創造的な「自己」との自己同一にもたらされる立場である。そこでは、無限に別であり得る意志が、別であり得ない唯一の世界に身を合わせていると言える。運命愛を体験する「自己」は、困苦や苦悩でさえも、権力への意志にとって有用だとして肯定するのである。また、西谷は権力への意志の「立場」に立つ「自己」の具体的体験として、永遠回帰も挙げている。その体験によって、「瞬間」が「永遠の現在」として捉えられる。それは、それぞれの「瞬間」が、独立しながらも直線的に結び付くことである。そうすると、「自己」が或る「瞬間」を一度でも肯定するならば、その「自己」は過去や未来をも肯定したことになる。従って、永遠回帰の立場においては、過去の自分を後悔したり、理想の自分を夢想したりして苦しむような「自己」は克服される。このような絶対肯定の立場の源を成しているのが、永遠回帰の体験なのである。

西谷は、権力への意志の「立場」に立つ「自己」こそ、ニヒリズムを超克した「自己」であると考えていた。権力への意志の「立場」とは、絶対的に固定された視点を斥けて、あら

【要旨】

ゆるものを権力への意志の現れだとする立場である。その立場において、創造的な「自己」は、必然性や運命に身を任せる。そして、このような絶対肯定の立場の根底には、「瞬間」を「永遠の現在」として体験する永遠回帰があった。以上の考察から、ニヒリズムは超克できること、ただし、それは過去や未来の自分と和解できない「自己を自己自身に繋ぎとめる重力」に苦しむ現在の「自己」のあり方を転換した「自己」によってのみ可能であることが明らかになる。